

# 本を選ぶ

## 高校図書館版

NO.41 2006年(平成18年)5月10日  
<http://www.las2005.com>

●発行/ライブラリー・アド・サービス  
〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 5-20-5-504 TEL=03-3235-6168

ぶつく・えんど

### 付箋を貼りながら

古風な言い方をすれば、いつの間にか「還暦」を過ぎた。どうってことないようそぶいていたが、やはりジワリと来ている。レジで小銭を出すのにもたつく、書類の日付を入れようとして、ハテ今日は…と急に自信がなくなる、といった調子。一番ドッキリしたのは、図書館で借りた本をかなり読み進んでから、「既読」であることに気付いた時だった。言い訳がましいが、これには少し理由があるかもしれない。数年来、私の読書傾向ははなはだしい二極分化を遂げ、今や海外ミステリーか、いわゆる人文系の本に限られてしまった。このミステリー本の多くを図書館で借りる。端的に楽しむための読書なので、黒衣である作者の力量や技に心地よく乗せられ(ハズレの時には思い切りよく途中下車する)、読後は忘れるにまかせる。その結果、数人の特別な作家の作品以外はほとんど覚えていない。「消費する読書」とでも言うべき読み方だが、実はこれらの本から学ぶことも少ない。これがまた愉しさを倍加させる。

一方、私にとって「考える読書」とは、「著者と対話する読書」と言えいいだろうか。共感はもちろん、反論もある。こちらの知識の持ち合わせでは間に合わないものも多いが、ストーリーを追うわけではないので、時間をかけて読む。たった一行の文章に、終日立ち止まってしまうこともある。そして、そのような箇所にはおもむろに付箋を貼る。ところがここでも少しばかりドッキリしたのは、やたらと

付箋の数が増えていること！ 以前ならば付箋はその本への共感や参考度の証でもあったが、今や単純に備忘のために貼っている自分に気付いて、いささか心細くなった。しかしながら、こんな変化にめげている暇はなさそうだ。気が付けば安楽な老後なんてどこにも存在しない。誰もが漠とした不安を感じているのに、立ち止まってその正体を考えようとする人が周囲にはほとんどいないといっている。流されっ放しでも、皆で溺れればコワクナイということなのだろうか。私はゴメンである。

依然として愉しむための読書の位置は揺るがないが、近ごろは付箋だらけで考え込む読書に加えて、映画や質のよいドキュメンタリーなどを観ながら考えることも多い。ほとんど映像を「読んでいる」状態にひとしい。映像のインパクトは強いので、付箋がなくても大丈夫、というのもいい。

ところで、最近「読んだ」映像の中で最も考えさせられたのは、フランスなど三カ国合作のドキュメンタリー映画『ダーウィンの悪夢』である。アフリカのビクトリア湖で、輸出用に放流された外来魚がもたらしている「悪夢」とその背景に迫る秀作だ。ヨーロッパや日本の食卓を豊かにするために、アフリカで何が起きているか。言葉を失う映像がつづく。観ながら記憶がざわついた。数日後、行きつけのスーパーで確認した魚の名はやはり「ナイルパーチ」、原産国はウガンダ(映画の取材地はタンザニア)、切り身二切れ入りのパックが397円…。何気なく目にしていたものが象徴する過酷な現実立ちすくみながら、頭の中の映像に、思わず特大の付箋を貼り付けた瞬間だった。(早田 リツ子：滋賀県在住)

# 貸出が減ってしまった！

着任4年 開かずのロッカーも整理

木下 通子

皆さんオリエンテーションは、終わりましたか

私は、気合い十分でバッチリ、1年生に顔売りました。今、埼玉県高等学校図書館研究会の司書部役員をやっているのですが、その関係でこの春休みに新任司書研修会に参加しました。そこで、この「本を選ぶ」で執筆している宮崎健太郎さんに、「新入生オリエンテーション」について講義してもらったのです。

おおざっぱな私と違って、仕事が細かい宮崎さんは、オリエンテーション実施のための準備シートやタイムテーブルやポイントをきっちり押さえたレジュメを作って来てくれました。オリエンテーション直前にその研修に出て、しっかり気合いを入れたので、もう怖いものはありません。

「司書はプロです！本のこと、調べたいことがあって困った時には木下へ」と、元々大きい声を大にして、65分間しゃべりまくりました。

そうそう、それから、ワードが使えるようになりました！こう書くと、なんだそりやですよ。今まで新着図書案内を一太郎で作っていたのですが、この春、思い切ってワードを使って書いてみることにしました。一太郎を使い慣れていた私には、ワードは難しいというイメージがあったのですが、なんとか上手く使えました。ワードは文字飾りや文字装飾が豊富で、テキストボックスを使えば、コーナー分けも楽々。タイトルも、今まで使っていた「らいいぶらりい いんふおめーしょん」から「Lib—図書館とあなたをliveで結ぶ情報紙」に変更しました。

着任して、初めての蔵書点検

そんな気分一新を図れたのも、3月に蔵書点検をしたおかげでした。前任校から数えてもおよそ6年ぶり。蔵書点検というと、基本カードの読み合わせというイメージが浮かび、大変な仕事だという思いが強い私は、まずは人手を確保しようと、2月中旬から図書委員OB、OGにメールでお手伝い募集をしました。

人手が必要なのは、他にも訳があります。蔵書点検と共に、ぎゅうぎゅうになっている書架の本を書庫に移動し、着任4年目にしてまだ封印されているロッカーや棚をすべて開け、中に何が入っているかを確認・整理し、書庫の中を片づけ、書庫の本を分類番号順に並べ替え、書架に収まらない不要の本を廃棄しようと思ったのです。

蔵書整理&蔵書点検は、3月14日から17日まで五日間で行いました。

初日に集まった卒業生が16人。みんな、現役大学生で、長〜い春休みを満喫している人たちです。バイトを休んでボランティアにかけつけてきてくれた子もいて、ありがたい限りでした。

蔵書点検用のバーコードリーダーは3台借り、それを読むのに3人。開架書架から私が事前に抜き出していた本を書庫へ「所蔵変更」して書庫へ移動するのに2人。新聞・雑誌の整理をする人が5人。書庫の本を並べ替えるのが2人。ロッカーを開けてみる人が2人…と、細かい仕事が好きな人は片づけ作業、単調な仕事が苦にならない人はバーコード読み係とみんな適材適所にちらばって、頼もしい限り。手伝い部隊は一日4〜5時間働いてもらったのですが、バーコードは三日で読み終わりました。

週の後半になるにしたがって人はどんどん減っていき、最後の二日は将来司書になりたいと思っている2人が残り、残務処理を手伝ってもらったのですが、いつもひとりで仕事をしている身にとっては、おしゃべりしながら、本当に楽しい時間でした。

これで、開かずのロッカーは無くなり、不要なものは処分し、散らかっていた文房具や紙類などは位置を決め、そこに納め、どこに何があるかの表示ができました。

書架は分類番号順にきちんと並び、書庫も整然と片づき、POPが得意な子もいたので、ついでに「ブラウジングコーナー」「レファレンスコーナー」などの書架表示もつけてしまいました。

なにより助かったのが、この蔵書点検中に、3

人の子どもが病気にならなかったことです。「お母さんは、来週は蔵書点検で休めないから、風邪ひくんじゃないよ！」と気合いを入れていたのがよかったのかもしれない。

片づけ下手の木下さん。新学期に入ってから遊びにくる卒業生に、「まだ、散らかしてませんね」とほめられています。嗚呼、このきれいさがいつまでもつやら。

### 去年は貸出率が下がりました

一昨年 1 人あたり 15.5 冊あった貸出が、10.6 冊に落ち込んでしまいました。パソコンの更新で貸出できない期間がちょっとあったり、パソコン導入で予算が削減されて、書籍の購入も 300 冊ほど減ったのですが、それでもこの一人あたり 5 冊というのは、私にとっては、大ショック。

新刊案内は 2 週間に一回発行しています。案内がでると本を借りに来てくれる人もいて、これは、たぶん、前年度と変わりなし。

司書部会のお仕事をしていて、出張で学校を開ける回数が増えたけど、子どもたちの病気が減って休む回数が少し減ったので、たぶん、これもそんなに変わりなし。

確かに、4 年目になると、着任してすぐのような活気は望めません。ライトノベルが入っていなかった図書館に、ライトノベルが入り始めたとか、レイアウトを変えて使いやすくなったとか、目新しいことがあると、貸出はぐんと伸びます。でも、その過渡期が過ぎてからが本当は大切で、高い貸出率を維持するには、努力が必要なのです。新刊を素早く受け入れて、いつも新鮮な本が並んでいるようにするとか、予約の本をすぐに発注して貸せるようにするとか。 去年は、一昨年より、リクエストで購入した本の冊数は増えたのです。(674 冊→1100 冊)でも、何か足りない。落ちついて考えると、私の利用者への対応が悪かったのです。

まず、生徒への声かけがおざなりでした。声をかけられてうっとおしい子もいると思いますが、「この本を読んでいるなら、この本もおもしろいよ」とか、「〇〇さん(作家の名前)が好きなの？」など、貸出をする時に、ちょっと一声かけて会話の糸口

をつないでおくと、次にその子がカウンターで声をかけてくれることがあります。こういう声かけ。

それから、本を読む時間があまりとれませんでした。授業との連携が少しずつできるようになり、その授業の関連本を読むことに時間が割かれ、生徒が好きそうな流行の本をあまり読むことができなかつた。だから、会話が弾まない。授業と連携したことも、貸出率の増加には、直接結びつかなかつたようです。

### 今年度の目標を立てました

今まで続けてきた新着図書案内を定期的に出すとか、リクエストに素早く応えるというのは、大前提。それ以外に頑張ることとして、本を読むこと。これは、自分で時間を作って努力するしかありません。

「情報」の授業と連携することによって、先生方とのつながりが広がりました。今年度も、「情報」の時間はもちろん、国語の「近現代」の授業でも図書館を使いたいと声をかけていただいています。それから、我が校の名物教頭先生が毎週木曜日の朝、7:30 から 45 分間、「学びのサプリ・スーパー」という高校生のための「学びの技法」講座を開講していて、1 年生から 3 年生まで 150 人近くの受講生がいるのですが、このサプリとタイアップして、何か図書館でおもしろいことを展開できないかなと考えています。教頭先生もノリのいい方なので、連携するとおもしろそうです。

ブックリストも作ってみようと思っています。「笑える本」「泣ける本」など、東高オリジナルバージョンのブックリスト。これは、図書委員の生徒といっしょにやってみたいと思っています。

貸出が落ちたからって、落ち込んでなんかいられません！「パスファインダー」も作ってみたいし、実は、図書館のHPを立ち上げようという話もあります。今年度から、利用者カードも導入することになりました。今、生徒と一緒にその図案も作成中です。オリエンテーションで一年生にも顔を売ったことだし、せつせとカウンターに出て、生徒とおしゃべりして、頑張つて、貸出を伸ばします！秋の中間報告を期待して下さい。

(きのした みちこ:埼玉県立春日部東高校図書館)

## 高校生におすすめの絵本のシリーズ、今人舎から

今人舎の「考える絵本」

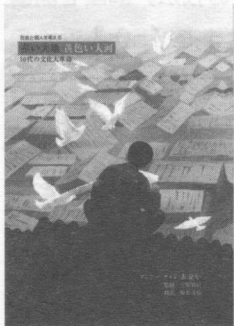
このシリーズはA5版。絵本にしては小さい。ラインナップは既刊・予定あわせてつぎの通り。

1 希望まで360秒

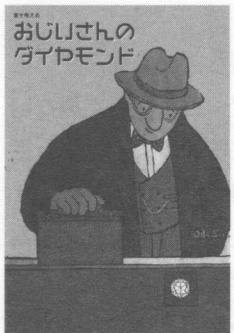


『レッドツリー』  
ショーン・タン著  
早見優訳

3 社会と個人を考える



『赤い大地黄色い大河』  
アンコー・チャン著  
稲葉茂勝訳



『おじいさんのダイヤモンド』  
池上彰訳

2 Mortal を考える



『泣いてもいい?』  
グレン・リングトゥヴィズ著  
田辺欧訳

4 年をとるってどんなこと?



『バニラソースの家』  
ブリット・ベルツィ著  
森信嘉訳

5 富を考える  
『おじいさんのダイヤモンド』  
池上彰訳

『レッドツリー』は子育て中の方、学生、中・高生、司書や先生などに、未来を信じられる「何か」を受け止めてほしいという児童出版界の実力派新人・今人舎から2004年2月刊行

その後、『レッドツリー』『泣いてもいい?』『赤い大地黄色い大河』の全てが、いくつもの新聞や雑誌の書評に取り上げられました。新しい出版社の本が朝日新聞や読売新聞の書評に取り上げられるのも珍しいことです。



最新刊の『バニラソースの家』は、アルツハイマー病をテーマにしたスウェーデンの絵本。スウェーデンでは、絵本の売り上げのうち10クローネ（約160円）が、アルツハイマー病の研究費用に使われています。今人舎でも認知症の団体などへの寄付を検討しているとのこと。

また、7月に発売になるのは、今話題の池上彰さん（元週刊こどもニュース・キャスター）がはじめて絵本の翻訳に挑戦した作品です。夏休み前に話題をよぶこと、間違いなし。

池上さんは、国際情勢や社会・経済情勢を解説した本をたくさん書いていますが、絵本は、はじめて。ですが、今回挑戦した『おじいさんのダイヤモンド』は、ナチスの迫害を逃れ、ヨーロッパからアメリカに渡ったユダヤ人のおじいさんが持っていたダイヤモンドの「一生」と、おじいさんが死んだあと、それを見つけた家族たちのようすを描いた社会派ものです。この点で池上さんは

上は、L A S探検隊でも次のように紹介した、今人舎から半年に1冊のペースで発行されている翻訳絵本シリーズです。(2003/9/18)

訳者としてまさに適任です。

ところが、一見、社会派の作品のように見えるこの本も、年齢を問わず読者に「富」、そして人や家族の幸せ、人生を考えさせてくれています。絵本というメディアを通して、この本の主旨が効果的に表現されました。

社会派といえば、『赤い大地黄色い大河』もまさにそうです。絵は、日本の読者の多くが引いてしまいそうな硬派ぶり。これは昨年のポローニャ国際児童図書展の大賞作品です。児童図書展会場で作品を見た日本の出版関係者は、一様に「素晴らしい絵だけれど、日本では売れそうもない」と、だれ一人として版權交渉をしようとしなかったといいます。それに挑戦したのが今人舎でした。しかも、社長の稲葉さん自らが翻訳しました。稲葉さんはこう話しています。

「この本は、中国の文化大革命の最中10代だった著者アンコーの心のうちをすばらしい絵で表現したものです。現代の中国を知るうえで欠かせぬ文革がどんなものだったかを、やさしく、それでいてなまなましく教えてくれます。でも、それだけなら、私も手をだしませんでした。四方院（中庭を四方で囲む建築様式）の屋根に上ったアンコー、そして、紅衛兵に封印された書物を隠れて読みあさるアンコーに、現在の日本人が、何かを感じるのではないかと思ったときに、出版しようと決めました。あまりお金をかけられないことから、半ばしかたなく自分で翻訳しました。」

稲葉さんが指摘した部分は、まさに読書推進に取り組む司書さんや先生方には、たまらない味わいがするところ。読書のすばらしさを、読者にあらためて知らせてくれます。

前述のように、LASではこのシリーズに当初から注目してきましたが、今人舎は新人でありながらやはりただものではないようです。

「ただならぬ」もう1シリーズ

新人・今人舎の実力を示すのは、「考える絵本シリーズ」ばかりではありません。「なんでも学オロ



ジーズ」という、とんでもなく凄い、大型しかけ絵本（原作はイギリス）が、今まさにブレイクしています。

シリーズ第1弾の『ドラゴン学』は、昨年10月に発売され既に5刷りとのことですが、この人気ぶりは、昨今流行りのブログを見るとよくわかります。例えば、Googleで『ドラゴン学』を検索すると何百件もヒットし、そこには書評や読書感想がひしめいています。

ドラゴンがいかにも実在するかのように描かれた絵本には、仕掛けがいっぱいです。ドラゴン文字の解説といったなぞ解きもあって、ファンタジー的。「進化論」まで持ちだして、「かつては存在し得ないと考えられていたカモノハシやオカピが実在している。ドラゴンも同じことだ」とまことしやかに描かれたファンタジーの世界に、年齢を問わず引き込まれるのです。

第2弾の『エジプト学』は、さらに現実味をもたせようとして、吉村作治先生の監修を受け、地名や人名の表記等がイギリスの原書にくらべてさらに厳密です。吉村先生は「この本は、自分がはじめてエジプトに訪れたときの感動にも匹敵するわくわく感を与えてくれた」といったことを帯に書いていますが、こちら発売3ヶ月で3刷りと好調です。続く8月発売の『魔術学』、来年発売予定の『海賊学』は、ファンタジー性や凝った作りがいつそうすばらしいと、今人舎では自信を持っているようです。

このように、今人舎の動向は今後も注目に値するでしょう。

## 見晴らしが取り柄の図書館です

## —8年目のレポート—

9

宮崎 健太郎

昨年の春に転勤して1年。ようやく、この学校の流れがつかめてきました。図書館の広さにもようやくなじめた気がします。この広い図書館に、昨年6月、愛称を付けました。その名は「みはらし図書館」。職員会議で承認された、正式な愛称です。命名者は学校説明会の校内見学の際に案内で回ってくる先生方。図書館を紹介するとき、資料について触れなくても眺望の良さだけは忘れず自慢するのです。司書としてはムツとしますよね。

でも、それもさもありなん、というのがこの図書館の悲しい性。というのは普通教室が三階までしかないホームルーム棟の五階に図書館があるのです。言い換えれば、日常の導線とは逆のどんぶり。小田急の箱根や中央線の高尾に匹敵する(ローカルでゴメンナサイ) レジャースポットなわけです。それならレジャーつばいイメージを定着させてしまおうと居直った結果が「みはらし図書館」というわけです。

ただ、「みはらし」にはもう一つ、情報を探す「みはらし」の場、という意図も。それに気づいてもらうため、「あなたの<?>を<!>に」というキャッチコピーを並記しています。

今年の新入生オリエンテーションでは、イシュトバン・バンニヤイの『Zoom』(ブッキング社)という絵本を紹介しました。最初のページにある大きな赤いものが、次のページにはニワトリのときかに……と最後には宇宙に浮かぶ小さな地球にまで文字通りズームアウトしていく作品です。この本を一通り見せ、何かに行き詰まったり知りたくなったとき、「みはらし」図書館で視野を変えてね、と呼びかけました。呼び名だけでなく、図書館機能としての「みはらし」の利用も定着してくれるといいのですが。

## &lt;図書委員会活動の構造改革&gt;

話は変わりますが、この春には図書委員会の活動を大幅に変えました。昨年度の委員会活動がボ

ロボロで、必要に迫られてではありますが……。図書委員の半分は「カウンターでピッピやるだけだから楽そう」で図書委員会に入り、当番が面倒になって脱落していきます(生徒談)。一方、やる気のある生徒は物足りないとも言い残します。そこで分掌での「図書委員会とは?」と原点に立ち返った議論の末、「魅力ある図書館を作る、図書館の魅力や読書の魅力を生徒に伝える」を活動方針として、生徒とともに委員会の活動を白紙から作り直すことにしたのです。

委員会活動からはカウンター当番を廃止しました。生徒の図書委員会観を変えるのが主目的ですが、もともとプライバシー上の理由で問題視していたのです。その代わり、メインの活動を資料紹介に改めました。これは委員全員が年度に一週、資料展示と展示を紹介する通信を発行するものです。これだけは必ずやらせようと年度頭の委員会で念を押しました。

年一回のこの活動だけだと図書委員としての自覚が育ちにくいだろうと、整理・広報・放送の三つの係で毎週の当番は維持。さらに、文化祭の参加などは「グループ」活動とし、委員の有志が参加する形に変えました。委員会活動ですが、委員外の参加も拒まず、委員になれなかった希望者が委員会に参画できる道を残しました。実際、一部のグループは他委員会の執行部が図書委員に手ほどきしていたりして、なかなか面白いです。

仕事の優先順位をつけたのは、生徒のやる気に応じて活動量の差を容認するという方針から。やる気のある子が活動量の差に不平等感を持たず、むしろ自発的に活動しやすくなればという配慮のつもりです。

手もかかりますが、図書館に対して自発的に何かしたい(してもいい)という子が公共図書館の図書館ボランティアや図書館協議会のようにみはらし図書館を育てるんだ、という意志を持ち始めているような気がします。まだ始まったばかりの取り組みなので、1年間維持できるかはまだ未知数。来年の今頃、図書館の雰囲気はどう変わっているか、いまから楽しみです。

(みやざきけんたろう：埼玉県立新座高等学校)

## この国のことを表から裏から

金原 瑞人

理論社のYA新書〈よりみちパン!セ〉はおもしろい、というか、すごい。養老孟司、白川静、宮沢章夫、伊藤比呂美といったラインナップは、ごく一般的だが、その一方で、しりあがり寿+祖父江慎(『オヤジ国憲法で行こう!』)、リリー・フランキー(『ことばの教室』)といった、ちょっとはずれ系で、絶対楽しそうな裏ラインナップも充実しているのだ。見事というしかない。

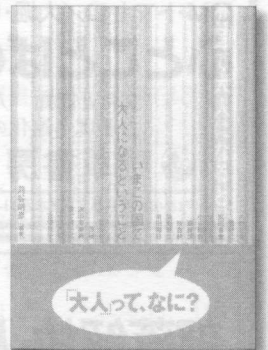
第1期10冊のなかで、衝撃的だったのが森達也の『いのちの食べかた』。これは畜殺の現場の描写や、そこで働く職人さんの作業の説明から始まり、生き物を食べなくては生きていけない人間、その人間を支えるために働く人々についての考察があり、さらに被差別部落問題、差別問題、いじめの問題、事なかれ主義のメディア批判、戦争へと広がっていく。そこに筋が一本、しっかり通っているのがすばらしい。ずしんと重い一冊だ。

そのまったく逆について出てきたのが、みうらじゅんの『正しい保健体育』。「男にとって大事なのは『挿入する』ことではなく、『発射する』ことだ」ということがわかりました。／しかし男はスパイでもあります。秘密裏に行動します。「潜入」しているいろいろなことを調べます……そのときに使用するのがコンドームという『サイレンサー』なのです」といった、本音まじりのジョーク、冗談半分の本音、身も蓋もない正直本、性教育の裏教科書だ。これには驚いた。これをヤングアダルト向けに堂々と出す出版社にも驚いた。しかし、出版されてみると、思いきりうなずける一冊だったのに、また驚いてしまった。

このシリーズ、現在第II期が刊行中だが、このなかでぜひ勧めたいのが小熊英二の『日本という国』。これは明治以降の日本という国の歴史を非常にうまくまとめた一冊だ。日本の歴史の本なのに、最初の章は「なんで学校に行かなくちゃいけないの」。そこに競争社会奨励派である福沢諭吉の話が出てきて、その思想が説明され、義務教育というの

は国を強くするために作られた制度だということがわかる(「この『義務教育』というのは、英語のCompulsory Educationの翻訳で、明治時代には『強迫教育』と訳されてもいた。つまり、国中の子どもは、『強迫』してでも学校に通わせるというわけだ)。そして西洋の一員となって、東洋を侵略する日本の骨格が作られていき……というふうには話は流れていく。発見と納得の連続に、思わずうなってしまう。

さて、このようにしてできあがった「日本という国」で、いま大人になるということ、成熟するということは、どういうことなんだろうか。これは難しい! いま自信を持って、おれは大人だといえる大人がどのくらいいるだろう。そういったことについてのエッセイ



『いまこの国で大人になるということ』刈谷剛彦編著／四六判並製／352頁／定価1700円＋税／2006年5月紀伊國屋書店刊

をまとめたのが、『いまこの国で大人になるということ』(刈谷剛彦編著、紀伊國屋書店)。書いているのは、社会学、心理学、精神医学、生物学、宗教学、文学といったジャンルの専門家を中心に16人。いろんな人がいろんな角度から、いろんなふうには書いている。おそらく16人とも、胸を張って、おれは大人だとはいえそうもない人々だ。

「よりみちパン!セ」で『14歳からの仕事道』を書いている玄田有史は、大学時代に迷うことの大切さをわかりやすく説いている。「サブカルチャー」こそ、精神科医である自分の分担であるといっている斎藤環は『ガンダム』や『エヴァンゲリオン』を例にとって、現代の成熟の問題を考察している。小谷野敦はいつもながらのユーモラスな毒舌をもって日本の教育批判、大学批判を(このなかにも『学園のすすめ』が登場)。その他、近代という問題からめて書いたものもあれば、ジェンダーという切り口から書いたものもある。読者対象は大学生あたりだろうが、ものによっては高校生にこそ読ませたいものもある。というか、まずは、「自分は大人だ」と思っている人たちにこそ読んで欲しい。

◎ (かねはら みずひと：法政大学教授・翻訳家)

□浅野智彦 編

## 検証・若者の変貌

失われた10年の後に 現在の若者  
叩きは果して妥当なのか。2520円

□小杉礼子・堀有喜衣 編

## キャリア教育と就業支援

フリーター・ニート対策の国際比  
較 若者政策の最新報告。2415円

□M・トマセロ/大堀・中澤 他訳

## 心とことばの起源を探る

文化と認知 人間に特有の認知能  
力とは？進化の謎に迫る。3570円



**勁草書房**

\*価格税込  
http://www.keisoshobo.co.jp

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 TEL 03-3814-6861 FAX 03-3814-6854

# 新・国史大年表

全九巻+索引一巻  
日置英剛編

空前絶後の情報量!!  
古代から現代まであらゆる分野を網羅した、  
新しい時代の読む年表、いよいよ刊行開始!!

第一巻 古代(九九九年)第二回記本(〇〇七年)月号定  
第二巻 一〇〇〇〜一三〇〇年(第三回記本予定)  
第三巻 一三〇一〜一五〇〇年  
第四巻 一五〇一〜一七〇〇年  
第五巻 一七〇一〜一八五二年  
第六巻 一八五三〜一八八六年 第三回記本  
第七巻 一八八七〜一九二五年  
第八巻 一九二六〜一九六〇年  
第九巻 一九六一〜二〇一〇年  
索引巻(最終記本)

2006年10月より刊行開始!!  
全巻予約受付中!!

国書刊行会 〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15  
TEL.03-5970-7421 FAX.03-5970-7427 [税込]

NO. 23

## 部落解放・人権図書目録

2006 A5判/134頁/頒価300円(税込)

●2005年11月までに刊行(予定も含む)されている  
書籍約1,200点を紹介。ISBNコード付。

項目

《部落問題》総記・事典/現状/運動/教育  
/行政/歴史/文化・思想

《人権》基本的人権/人権一般/性差別/他  
部落解放・人権関係雑誌一覧

書名索引・著者索引・掲載出版社名簿

●書店様にご注文ください。

### 部落解放・人権図書目録刊行会

〒162-8710 東京都新宿区東五軒町6-24 トーハンビル内  
TEL 03-3266-9521



日本の音1 打楽器  
日本の音2 弦楽器  
日本の音3 管楽器  
日本の音4 歌・合奏  
日本の音5 歴史  
日本の音6 理論

●第4回学校図書館出版賞受賞!  
**日本の楽器**  
全6巻 [CD付]  
総監修 高橋秀雄 音楽監修 佐藤敏直  
中学・高校生・教師向 揃定価28350円  
プロの奏者が演奏・指導する実践に即した内容で  
す。多彩な写真で見やすく、わかりやすく、楽し  
く学習でき、各楽器の音を聞いて確認ができるよ  
うに、全巻CDが付いています。また日本の音楽  
になじみやすい新たな曲も収録しています。

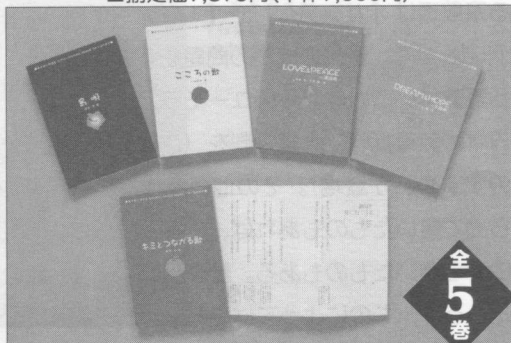
小峰書店

〒162-0066 東京都新宿区市谷台町4-15  
TEL03-3357-3521 FAX03-3357-1027

## 歌を読む詩集II

SMAPとORANGE RANGEで学ぶ詩の世界

■根本 浩他/著 ■四六変型判 ■各191ページ  
■揃定価7,875円(本体7,500円)



全5巻

ESTABLISHED IN 1919  
**金の星社** 〒111-0056 東京都台東区小島1-4-3  
TEL.03-3861-1861 http://www.kinnohoshi.co.jp

英語版

## アイウエオナス ビジュアル図鑑

動物、歴史、人体、宇宙、気象、文化、植物などの美しい写真を  
ふんだんに使用して紹介。



サイズ29cm×22.5cm  
61~72ページ  
全50巻  
揃本体価格  
200,000円

発売元: 株式会社 三善 〒167-0032 東京都杉並区天沼2-2-19  
TEL.03-3398-9163 FAX.03-3398-9170